

# これからの道徳教育について

A study of the Moral Education

中野靖彦

(Yasuhiko NAKANO)

はじめに

今の子どもたちの言動について、‘自己中心的’‘片づけ、挨拶ができない’‘他の子とコミュニケーションがとれない’‘パニック状態にすぐなる’‘言動が粗暴’などと指摘されている。

また、いじめなどは相変わらず減少していないし、最近の情報化社会では、直接、顔を合わせたコミュニケーションではなく、LINEやネットなどのSNSによる情報は子どもの世界にも入り込んできていて、いじめが学校や教師、親の見えないところで深く進行しているのである。

ただ、子どもは社会を映す鏡であり、大人社会を反映している。物が不足して食糧も十分ではなかった時代には、人は地域社会を作り、お互いに協力し合い、隣近所で助け合ってきた。集団ができると、そこに社会的な規範が生まれ、お互いが協力して生きる。

ところが、今、物も豊かでお金さえあれば手に入らぬものはない。一人一人が自分の世界で生きていける。24時間営業のコンビニで好きなものを買って、隣近所で借りることはない。お互いに協力しなくなったため、道徳的な規範意識も低下し、集団での活動を嫌悪する雰囲気も生まれている。

人間関係の希薄化は社会秩序の乱れをもたらし、道徳性などの低下とともに犯罪は増加する。誰でもいいから殺したいからという理由で通りすがりの人、さらには自分の祖父母を殺したと言う人たちの出現を招いた。ある少年の裁判で、ナイフで刺したら死ぬかもしれないということが少年に分からなかったという弁護士がいた。ナイフで刺したらどうなるかは子どもでも分かる筈であるが。

いま、道徳の教科化を急ぐのは、こうした人としての最低限の道徳性が欠けているという認識が根強くあるのだろう。社会で他人とともに生きるための基本的な力や態度が育っていないといえる。そして、それは学校での道徳教育が不十分ではないかとの意見も強く、学校での道徳教育の充実が叫ばれ、道徳教育改善の指針が出され、教科化が進んだ。

これまでも、心豊かな子どもの育成を願って、学校では道徳教育が行われてきた。しかしながら、学校での活動と家庭や地域との間で話題が共有されてこなかったことに、道徳的意識を育むことのできていない原因はある。子どもたちは、学校で学んだルールを一生懸命に守ろうとする。学校の行き帰りの大人たちの行動を見ているうちに、少しずつ大人の行動を身につけているのである。また、家庭でも、学校で学んだ道徳のことが話題にならず、どうしても教科の成績や学習に関心が移ってしまう。結局は、学校で学習したことが家庭や地域での実践の場で生かされていないのも、道徳性が育まれていない大きな原因の一つである。

## 1. 教科科の道徳教育になって

<フリー百科事典（ウィキペディア）より>

道徳教育がこれまで国語科や社会科といった教科の授業や特別活動といった教科外活動（領域）においても道徳教育が行われるものとして位置づけられている。学校および学校外活動の全てが道徳的であることが求められていたのである。

そうして、2015年の学習指導要領の一部改正により、これまで教科外活動（領域）であった小・中学校の「道徳」を「特別の教科 道徳」とし、教科へ格上げしたのである。それに伴って、検定教科書の導入、内容の追加、体験的な学習、文章表記での評価が明記されてきた。

その内容について挙げると（小学校中学年を中心にみると）、

・主として自分自身に関すること；小学校4学年までは「善悪の判断、自立、自由と責任」「正直、誠実」「節度、節制」「個性の伸長」「希望と勇気、努力と強い意志」5年以上には「真理の探究」というように、学年とともに内容が少しずつ異なってくる。

・主として人との関わりに関すること；「親切、思いやり」「感謝」「礼儀」「友情、信頼」「相互理解、寛容」

・主として集団や社会との関わりに関すること；「規則の尊重」「公正、公平、社会主義」「勤労、公共の精神」「家族愛、家庭生活の充実」「よりよい学校生活、集団生活の充実」「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」「国際理解、国際親善」

・主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること；「生命の尊さ」「自然愛護」「感動、畏敬の念」「よりよく生きる喜び」

発達段階によって求められる内容も異なり、広く社会性、道徳性を求めている。学校では、それぞれの学年で、内容に関わる教材を活用し、授業を行う。ここでは、実際の学校現場でどのような指導が行われているかについて考えていく。

## 2. 道徳教育の実践授業

愛知県下のある小学校（4年生）の教科化になる前の道徳の授業である。

① 主題：本当の友情とは（信頼、友情）

資料名 「アトリエの思い出」（小学館）

『レオナルドとアントニーは幼いころからの友達で、絵をかくことが大好きであった。二人は何でも正直に言い合える友達で、絵の勉強を競い合えるライバルでもあった。二人とも、画家として活やくすることを夢見ていた。

やがて、二人は有名な絵画の学校に入学した。・中略……。そのアトリエで夢中に絵を描いたり、将来の夢やおたがいの絵について語り合ったりした。中略……

学校を卒業してすぐに、レオナルドに大きなチャンスがおとずれた。彼の応じた絵が、大きなコンクールで大賞をとったのである。レオナルドは、真っ先にそのことをアントニーに伝えた。アントニーは自分のことのように喜んだ。中略……

大賞をとったレオナルドは、またたく間に有名画家となった。中略……。いつしかアントニーと会うこともなくなっていた。中略……

10年後、レオナルドは有名なコンクールのしん査員となっていた。

「今年の絵は、どれもすばらしいですな。」中略……。2つに絵が残った。中略……。きれいな色使いで独創性に富んだ絵に、レオナルドは心ひかれ、こちらの絵を選ぼうと決めた。中略……。それは見覚えのあるサインだった。

（アントニーの絵だ！）

中略……。レオナルドの一票で、大賞が決まることになる。レオナルドは、

友達の絵を選ぶのか・・・。

迷った末に、レオナルドはアントニーの絵に票を入れた。中略・・・アントニーの絵が大賞をとったのである。

その夜、中略・・・レオナルドは興奮気味に電話した。

「よくここが分かったね、君から電話をかけてくれるなんてうれしいな。」

アントニーは、なつかしい友達の声にとても喜んだ。

「君の絵がコンクールで大賞をとったことを一刻もはやく伝えたくてね。」

「それは本当かい。しかし、なぜ君がそのことを知っているんだい？」

「実は、あのコンクールのしん査にたずさわったんだよ。あれは君の絵だとサインを見て分かった。今回はすばらしい絵がたくさんあって、ぼくも迷ったよ。でも、友達の力になれて本当によかった。」

その話ぶりから、アントニーには、しん査時のレオナルドの心の中がかんたんに想像できた。しばらくのちんもくの後、

「そうだったのか・・・」

そう言うと、アントニーは力なく受話器を置いた。

しばらく、その場に立ちつくしたアントニー。彼の目から一筋の涙がすうっと流れ落ちた。

電話がきれた後に、ようやくレオナルドはアントニーの気持ちに気がついたのだった。・・・中略・・・数日後の授賞式に、アントニーの姿はなかった。・・・中略・・・

アントニーの絵の題名は、「アトリエの思い出」だった。』

## 指導（2 / 2）

- ・目標：互いに信頼し、助け合いながら、友情を深めていこうとする心情を育てる。
- ・指導過程(流れ)

つかむ（5分）

- 1 資料「アトリエの思い出」の前半の祖筋をつかむ。  
本当の友情について考えよう。

深める（35分）

- 2 登場人物の心情について話し合う。

あなたがレオナルドなら、アントニーの絵を選びますか。

(1) 自分の意見を発表する。

- <選ぶ> ・どちらも優れているなら、友達に賞をとらせた。  
・友達のアントニーを喜ばせたい

<選ばない> ・選んだとしても、友達には喜ばない。

- ・友達の絵でない方がいいと思うなら、その絵を選ぶべきだ。

(2) 全体で話し合う。

- 3 資料の後半を聞き、話し合う。

○アントニーは、そうして涙を流したのでしょうか。

(1) ワークシートに書く

(2) 発表する。

まとめる(5分)

4 これから自分が築いていきたい友情について考えて、発表する。

○あなたはこれから友達と接する中で、どんなことを心がけていきたいと思えますか。

(1) ワークシートに書く。

(2) 発表する。

つかむ、深める、まとめる、のそれぞれのステップでは、教師の指導上の留意点、注意点が記されている。

板書計画

---

□ あなたがレオナルドなら、アントニーの絵を選びますか。

選ぶ、選ばないの子どものたちの発言

□ アントニーは、どうして涙を流したのでしょうか。

・レオナルドの気づかいが、余計につらく、悲しい。

⋮

□ あなたは、これから友達と接する中で、どんなことを心がけていきたいと思えますか。

・ごきげんをとるのではなく、本音で違いを言い合うこと。

・相手の気持ちを考え、思いやりの心をもつこと。

・えこひいきをせずに、対等な立場で言い合うこと。

---

② これが、2時限目の授業の流れである。この授業から、子どもたちは何を学んだのだろうか。

1 道徳授業で使用する教材は、教師自身が作成するものもあるが、一般的には、文科省の学年相当の内容に準じた教材が使われることが多い。これも、信頼・友情を育てることを目的としたものである。

2 授業後も子どもたちのワークシートにも、思いやりの心を持つことの大切さ等々を学んだという記述も多く。子どもたちも、ある程度の教師の意図が分かったのではと推測される。

3 しかしながら、どんなことを心がけていきたいですか、の板書の内容で終わってしまっただけののだろうかという気がした。たしかに、教師としてはえこひいきをせずに、対等な立場で言い合うことを伝えたかったのはよく分かる。しかしながら、子ども心には、もっと複雑な気持ちも残ったのではないかと思う。

この教材をよく読むと、友達関係を維持することが大変難しいことを思い知らされる。本当のことを言った方がいいか、言わない方がいいかは大人でも迷うところである。

ここでは、レオナルドが本当のことを言った。レオナルドにすれば、友達のことを思いわざわざ電話した。このことがあって、アントニーは授賞式にも出られなかった。友達関係が崩れたとしか思えない。友達関係が崩れたままで授業は終えられない。

授業の発表の際、ある子どもが、アントニーの作品と分かった段階で、審査員を降り

たいと発言した。もし、私が同じ立場に置かれたら、やはり審査員を降りたいと思った。ただ、授業で、その子の発言が取り上げられ、みんなで考えるまでにいかなかったのは残念であった。教師も分かっている、そこまで入り込めなかったと想像はできるが、やはりすっきりしない気持ちである。

### 3. 道徳が教科化になることによって

これまで道徳は、教科外活動として位置づけられていた。毎日の生活や活動、さらに教科の中でも道徳に触れられてきた。しかしながら、教科となると、その内容がはっきり決められる。従って、それに沿った内容の教材で、目標に合わせた授業となってしまう。内容の読み取りに終わってしまう恐れはある。

しかし、友情ややさしさなどはいろいろな活動の中で、さまざまな体験を通して培われるものである。時として友だちとケンカもするし、自分の思い通りにならないこともままある。そのような貴重な体験を越えて友情はでき上がる。

学年にもよるが、もし、授業で、教材を活用する場合でも、生徒たち一人一人の子ども日頃の経験や教師の自らの苦しい体験や楽しかった体験も織り交ぜていくことによって、子どもたちも心豊かに成長できるものと思われる。

#### 1) 効果把握の難しさ：道徳的な態度、姿勢とは？

道徳教育の効果の把握をどうするかは、今まさに道徳の教科化の議論でも意見が分かれるところである。教科化して、評価をするにあたっての基準作りが難しい。

前述に挙げた教材をじっくり読むと、友だちが良かれと思ってやったことが結果として二人の友情関係にヒビを入れたことになるものであった。

単純に、板書のまとめにあるような意見が出れば、道徳的に高い評価と言えるのだろうか。友だちのことを考えて本当のことを告げるがいいか、言わないほうがよいか迷う。そのような迷いの中で、われわれは友情を維持しようと苦心する。そんな迷いも素直に込められたワークシートの内容ならば、これから生きて行く上で意義のある結論であり、評価される。

発達年齢によっては、子ども同士が本音でぶつかり、ジレンマを起こして迷わせるのはよくないという理由も分かる。しかし、道徳に正解があるかといえば‘ノー’である。それでも授業で、それぞれの年齢で、迷いながらも友だちの事や相手のことを真剣に取り組み、考える機会はある。道徳観だけでなく、行動が伴った道徳であって欲しいのは誰も同じ願いである。

教科化によって心配されるのは、画一的な規準で評価されることである。文章表記なら、多様な評価が可能であると思われるが、評価する教師が大変である。

#### 2) 効果的な指導、教材の活用

教科書が出れば、教師の心理的な負担は減るかもしれないが、画一的な指導によって、画一的な子どもが育つのは、何のための道徳科かよくわからない。

文科省の資料でも、道徳教育は学校での子どもたちの日々のさまざまな活動とリンクさせることが求められている。子どもには個性があり、活動の仕方や考えが異なる。

そこで、教える教師自身が、学校での子どもたちの種々の諸活動に照らし合わせてどう判断し、どう行動するかをしっかりと見据えた上で授業に臨まないと、教材の中だけの人物の

心情を読み取ることに終始してしまう。新学習指導要領における改善のポイントで「児童生徒が感動を覚える教材の開発・活用を規定」が指摘されている。教師として、また一人の大人として、子どもたちの心に響くよう、教材の内容をどう伝えるかである。そのためには教師自身が感動し、心揺すぶられる経験を多くすること、それを子どもたちとどう共有するかである。

特に資料については、教師自身がしっかり読み込み、子どもの理解を深めることが大切である。そのためには、当該学年にこだわらずに、子どもたちに、自分の生活している中で、資料をどのように受け取り、どう判断するかを一緒に考えていけるもののほうが望ましいような気がする。

授業後の子どもたちの多くは、大抵、よく分かった、これからは友達を大切にしたい、等々の感想を書く。多分、今日はよく分からなかったとは書かない。それをみて、今日の授業で子どもたちの心に訴えることができたと思いたくもなるが、ちょっと考えてほしいこともある。

2011年の高校生と教員に対する調査（樋田大二郎）によると、「おとなしくなった」、‘従順になった’生徒が増加し、‘よく勉強し、テストの点数や席次にこだわる生徒’が増えている。これを、生徒や教員が教育の「競争主義」を受け入れる傾向が強まっていると指摘しているが、本当にそう言えるのだろうか。

しっかり自分の意見を持ち、主張し、社会で生きて行く子どもたちを育てるのが、教育目標であるはずであると思うが。

#### 4. これからの道徳教育を考える。

##### 1-1) 教師の指導力の向上

道徳性や社会性の育成には、教える教師自身が社会性などを備えている必要がある。しかしながら、近年、若者の社会性の欠如が指摘されている。部活に熱中したり、サークルで多くの仲間と活動したりすることも少なくなったという。

とくに、情報化社会になり、情報モラルの低下が叫ばれている。スマホ歩き、電車の中でもスマホで育った人が教師になる時代である。SNSを使いこなせることは現代社会を生きる上で必要ではあるが、情報を扱うのと、人と直接接し、話すこととは次元が違う。授業は生きものであるとよく言われている。子どもたちの様子も、毎日毎日違う。同じ場面、同じ状況は少ない。生きている授業には教師の意図通りに進まないことも多い。場の状況に応じて柔軟に対応できる力と教師自身の日頃からの興味・関心の広さと多くの経験に裏打ちされた知識が教師の資質であると思う。

また、教師の指導力は学校全体の指導体制に支えられることも多い。教師同士が連携し、指導にあたる必要があるが、教師の社会性欠如は考えねばならない。

##### 1-2)

小・中学校学習指導要領解説（道徳編）に道徳教育推進教師の役割として、道徳教育計画の作成、推進、充実に関する事、指導体制、教材の整備・充実活用、情報提供や交換、家庭や地域との連携、評価に関する事が明記されている。そして、ほぼ100%の学校で配置されている。

まさに、推進教師は学校での道徳教育の要であり、役割は重い。しかしながら、もっとも肝要なことは、教師が相互に情報を交換し、常に、教師相互の授業を顧みながら改善を重ねていくことである。推進教師は、そのような学校全体の環境条件を整えることにある。

道徳教育推進教師に負担がかかり過ぎては、学校全体の運営に影響する。

## 2-1) 家庭の役割

### ア、食の乱れが心の乱れ

心豊かな子どもに成長するのに欠かせないのが体の健康である。体が不健康で、心だけが健康ということはありません。食生活の乱れが身体を蝕み、それが精神的な不安定をもたらし、人間関係の乱れと繋がるというような連鎖反応をする。

いまの子どもたちの体格はよくなっているが、体力が低下しているという。最近の体力テストの結果をみても、低下減少がみられるようだ。学校でも、疲れるからといって授業の合間の休みには運動場に出ないし、電車でもすぐに座る。床に座るのも平気な子どもたちもいる。体を動かさないから、お腹が減らない。減らないから食べない。食べないから、体力もつかない。この悪循環のスパイラルの中に、いまの子どもたちは置かれている。

このような生活環境の中で、子どもたちに、お友達と仲良くしなさいといっても無理な話しである。しかも、少子化で、大人からの風圧を一身に受けている子どもたちも常にストレスを感じ、いつ爆発してもおかしくない。子どもたちがキレやすくなった、がまん強くなかったというのも、食と心のアンバランスさが原因である。

さらに、子どもの基礎体温が低くなっているという。それではなぜ体温が下がってきたのか。それは食生活の変化にあるようだ。子どもたちの食事が細くなったことや偏食等とも関連するようだ。バランスある食事を十分に取らなくなり、エネルギーが沸かない。

特に、35度台の子どもは、朝、学校の一時間目には、まだ空ろな目をしており、注意も集中しないし、先生の言うことも耳に入らない。2, 3時限目になるとようやく目も覚めてくる始末である。全国学力テストによっても、朝食を食べる子どものほうが成績も良かったという（その後、朝食を食べさせる親が増えたようだが？）。朝食を取る子どもは、ちゃんとある時間には起きていることであり、基本的には、早寝、早起きができ、しっかり生活のリズムができている子どもである。リズムができている子どもは、自分がどのようにしたらよいか、いつ、もっとも能率が上がる等々についてしっかり認識できている。したがって、勉強にも集中できるのである。

規則正しい生活が、道徳性や社会性の発達の基礎になっているのである。

### イ 昔話は、心のワクチン？

昔話は、幼い子どもにとって怖い内容のものも多く、怖い話は、身近なことであるほど、その怖さは強くなり、恐怖心を植え付けることになる。

そこで、‘昔、昔、あるところに・・・’のように、昔の話として始まるようになったとも聞く。子どもにとって、これから聞く話は、昔のことであり、今のことではないことを思い込ませ、安心して聞かせる知恵があったという。こうすれば、怖い話しも、その怖さは和らげられるし、悪夢に魘されることもなく安心してぐっすり眠れる。

昔話には、日本古来の知恵があり、愛があり、踏み外してはならない人の道があり、勧善懲悪の筋があるとされている。たとえば、悪いおじいさんと良いおじいさんがいて、良いおじいさんが行っても褒美はもらえるが、悪いおじいさんが同じことをしても罰が与えられる話がある。内容は単純であるが、もし、悪いことをするとどうなるかについて、幼な心に刻みつけるのに意味があり、道徳的な心の育成にとってのワクチンを注射しているようなものである。このワクチンも一度限りでは効果はない。毎夜、親から繰り返して

んでもらい、知らず知らずのうちに心のどこかに残り、悪い事に対する抗体ができる。

今、子どもたちの規範意識の低下に対して、心の教育が叫ばれている。そして、学校でも、朝や帰りに、さらには道徳の授業などでも昔話などを教材に使って、命の大切さなどについて繰り返し教えられている。そして、子どもたちの道徳心などは身につけているし、いじめはいけないと心底から思っている。しかしながら、何故か、いじめや子どもの暴力などが一向に減らない。

それは、子どもたちが身に付けているのは観念としての道徳観である。観念としてしっかり身に付ければ、いじめや暴力はなくなる。ただ、分かっているのにいじめてしまうのは、何かがまだ欠けている。

子どもたちは、毎日の生活の中で、仲間と遊び、けんかして、悪口を言えば相手はどう思うか等々について学ぶ。しかし、今、そのような機会も少なくなり、自分の感情がストレートに出てしまうとも考えられる。もし、幼い頃に昔物語に触れ、その話が学校教育での道徳の内容に重なり合ってくれば、もう少し、いじめを身近なものとして、子どもたちも理解するだろう。そして、昔話の記憶が心のコントロールの役割を果たし、心の奥底に植えつけられた昔話が、殴りたいなどの気持ちを咄嗟の判断で止めることができるのである。

やってはいけないことを直前で止めるワクチンとして昔話があるとすれば、寝る前のほんの一時ではあるが、子どもに聞かせてあげることも大事である。

幼い頃の経験は、将来の貴重な財産である。

#### ウ 家訓

家訓というと、昔のことを連想するが、家には家のルールがあり、学校には学校のルールがある、そのルールが社会や組織を維持するのである。テレビドラマで、篤姫や直江兼継が放送され、多くの人が視聴されたと思う。そこには、江戸時代、家族が困難な状況に直面したときに、親子が、また家族が真剣に振る舞っていた姿が映し出され、考えさせられるものがあった。時として、家族間での激しい葛藤もあるが、親子の強い絆や親や家族が信念をもって意思を貫く姿には、現代ではあまり見られなくなった。家庭内で代々にわたって受け継がれてきている家としてのきまりがあり、それが家訓として守られている。

上杉家家訓16ヶ条など、北条家など有名な家訓も多くある。家訓というと家を守るために、時として個人より家が重視されるような印象を与えることもあるが、家訓には人としての生き方や、家族の繋がり大切さ、一人一人が社会の中でたくましく生きていくための想いが込められている。

かつては、大家族が多く、家族の秩序を維持しなければならないために、それなりのルールが必要となったと考えられ、そこに家訓があった。しかし、時代がくんだり、核家族が増えたいまの時代、いつも手の届く身近なところに家族がいる。そのために、あえて決まり事は必要でないと思っているフシもある。しかし、現実には親子のふれあいが減り、お互いのコミュニケーションが取れなくなっている。話し合えば分かる些細なことで家族に亀裂が生じることも多々ある。

いつでも話せる、話し合えばわかると思っているところに落とし穴もある。同じ屋根の下で生活いくための基本的なルールは必要です。

たしかに、江戸時代では社会の変化がいまほど急激ではなく、同じ価値観でもって親が子どもを躾けることができたとも言われている。しかし、時代が変わり、社会の価値観が

大きく変化する時代にあっては、親の価値観を子どもに継いでいくことは難しい。親子の断絶と嘆く人が増えている。最近、ある生命保険会社が現代版【家訓】コンテストを行った記事があった。「一日十笑、みんな（家族）で百笑」がグランプリを獲得していた。時代を超えて、変わらないのが人と人のつながりである。家族のみんながあいさつをして、楽しみながら生活できることを願うのはいつの時代でも同じ。

家訓といえば家の決まりであるが、クラスには級訓があり、学校には校則がある。また、国には憲法があり、それらによって、われわれの生活が守られている。同じ社会で生活する以上は、その社会の人たちとの人間関係をスムーズにしたい、仲良くしたい。そのためには、お互いに共有できる社会的なルールが必要となる。

家族みんなで決めたこと、学級みんなで決めたことを守るということは、責任や自律の姿勢を学ぼうえでも重要である。しかも、社会が変わり、住む人々が変わっても、社会生活を営むには、その底に脈々と流れる人と人とのかかわりは大切であるし、それは古今東西、変わらないものです。

こんな想いを持つことが、道徳心の向上には欠かせない。

#### 参考・引用文献

- ・『道徳教育』2015 フリー百科事典「ウイキペディア」
- ・樋田大二郎 『高校生時の思わぬ大きな変化』2011  
月刊高校教育4、P88－91
- ・中野靖彦 『道徳教育についての考察』2014 愛知淑徳大学論集－教育学研究科篇  
－第4号、P20－38
- ・中野靖彦『今、家訓を見直してみてもは』2009 ゆう&ゆう（1月号P20－21）  
愛知県教育振興会